

# フィールドワークを終えて その2

2年4組学級通信 第11号 1996.5.17

君たちは、遠足から2週間ほどたった今、長田区の風景を覚えていますか？

ところで、今週新聞を読んでいると、ちょこちょこ「震災」についての記事が載っていました。たとえば、

- 1、罹災証明書の余白に現在の気持ちをつづり、公的支援を求める署名をしているという記事「被災地の『一筆』切々（5/13付け朝日新聞朝刊）／一筆願ひ申し上げます。生きていくのがいやに」
- 2、公的支援を求める人たちが東京まで訴えに行った記事「自民本部に『被災者の鎖』、お年寄りら公的支援訴え230人（5/14付け朝日新聞夕刊）」
- 3、全体として、被災地の人数の減少がやっとおさまりつつあるという記事「神戸に人戻った／震災後初4200人増（5/15付け朝日新聞朝刊）」

などの記事がありました。とくに3の記事については、神戸市9区のうちの8区までは、やっと人口が増加した、というもののなのですが、依然減少しているのは長田区であるということもあわせて書かれています。

長田区に行ったときの気持ちを、これからも忘れてはならないと思います。ということで、前号に引き続いてフィールドワークの報告です。

②なぜ「定住外国人生活復興センター」の活動が必要なのか…まずはじめに言われたのが、①のようなこと（在日外国人の人々は、差別の結果殺された、ということ）は、2度と起こってほしくないということでした。そのためには就労保障をはじめとして、住居や生活のさまざまなことをきちんとしていかねばなりません。しかし、「日本社会」は外国人とくにアジアの人々に対して、ものすごく冷たい社会です（そもそも、日本人も「アジアの人間」なのに「アジアの人々」と言うことに大きな問題がある）。たとえば、それぞれの国の人のいろいろなものの考え方を受け入れずに、自分の尺度で考えてしまう、ということがあります。このため、仕事につきにくい、あるいは生活がしにくいという状況が、震災前と同じようにあるのです。ある公園にベトナムの人々がかたまって住んでいることが報道されたことがあります。その原因は、日本人の中でひとりで住むのはすごくつらいことだからだ、キムソンギルさんも言うておられました。また、在日外国人に対する「公務員の国籍条項（公務員については、試験すら受けられない）」の問題も徐々に改善されつつありますが、依然あります（5/17付け朝日新聞朝刊）。このような状況を変えていくために「定住外国人生活復興センター」の活動が必要なのです。

③今、何が必要なのか…じつは、みんなが出ていったあと、キムソンギルさんに「自費ではあるがカンパ（募金）をしたい」と申し出たところ、「自費やったら、先生いいよ」と言われました。そして、「それよりも、実際に来てボランティアをしてほしい。そうすれば、もっといろいろなことがわかる」と続けられました。私も、「そうですね、じゃあ

身体でかえしますか」と言って別れました。

遠足から帰る道で、私たちが本当にできることは何かを考えました。そして、こんな言葉を思い出しました。「金のあるものは金で、学力のあるものは学力で、知恵のあるものは知恵で」これは、戦後すぐのころに、朝鮮人の人々が民族学校をつくったときの合い言葉です。

私たちが持っているものはなんでしょうか。そして、何ができるのでしょうか。今一度考えましょう。